

モーリシャス豆知識・小話 第20号

2018年12月
在モーリシャス日本国大使館

(1) モーリシャスの選挙制度改革



日本では憲法9条の扱いを巡る憲法改正について議論が行われていますが、モーリシャスでも選挙制度改革を含んだ憲法改正について議論が行われてきました。以前このコラムでもご紹介した当国独特のベスト・ルーザー・システムをどうするか、選挙区の区割りをどうするか、などです。

その背景には、現在、果たして多民族国家のこの国がきちんと国民の声を国政に反映できているのか、という問題意識があるようです。PMSD等を中心とする野党は、そのためにも1973年来行われていない人種構成に係る国勢調査を行うべきとの主張です。これに対し与党を中心に、そんなことをしたら民族・人種間の新たな緊張を惹起しかねない、そもそもこの国は、もはやインドならヒンドゥー教徒などという民族と宗教をセットにしたような画一的な区切りは難しい、ひとことで何系、何宗教などと単純な色分けができないほど国民はいろいろなバックグラウンドを有するようになっていて、との見方もあります。よそ者の私などは、どの意見に対しても、そうなんだあ、とうなずくしかないところですよ。

普段は、例えば先般当地で開催された世界ヒンドゥー会議でヒンドゥー教徒の結束が確認されたり、タミールコミュニティーのお祭りがあつたりと、それぞれの文化伝統は大事にしつつ、やはりOne Nationという旗印の下での民主主義を、それぞれの政治的立場と主張で進めていこうという意思の表れなのかなと思います。

今回の改革案は結局、12月11日の議会で、過半数の承認が得られないとの見通しで首相は採決で諮ることを断念しました。本件は来年の国政選挙を見据えた政治的な駆け引きとの見方もありますが、しかし今回の改革案では、例えば

女性議員の比率を男性議員と同等にするなど、いかに国民の声を取り上げていくか真剣な試みが議論されてきたと思います。

選挙法についての憲法改正が試みられたのは独立以来初めてだったようです。この議論は今後も続いていくものと思いますが、いつか遠い未来、日本もそうした議論を行うことが必要な日が来るのかもしれませんが。もしかして今この議論を目の当たりにしている日本人の自分は、タイムマシンに乗っているようなものかもしれない、と感じた次第です。

(2) 2018年の締めくくりに当たって



さて今年もはや年末。当館もこの一年、相変わらず駆け足で自転車操業を続けてきた感じです。今年はモーリシャス独立50周年ということで、モーリシャス政府からは当地駐在の外交団に対し、各国の文化イベントを積極的に実施してこの記念の年を盛り上げてほしいとの依頼がありました。

我が国にとってもモーリシャスが独立を果たした直後に国家承認を行ったことから、今年はその50周年の記念すべき年でした。それ故、当館もこの一年、積極的にイベントを実施してきたところです。当国で初の日本映画祭、初の柔術日本大使杯、初の知的交流イベント、初の書道展とワークショップ等、当館ができて日が浅いこともあり、初物づくしの年でした。それだけに手探りで準備が難しかった面がありましたが、少しずつ、この国の人たちにとって日本が身近で親しみやすい存在になって行けばよいなと思います。

また今年も、文化面だけではなく政治経済面においても、佐藤外務副大臣、逢沢日AU議連会長の来訪、ヨハネスブルグ日本商工会議所一行のJETRO ミッションの来訪など、活発な動きがありました。様々な分野・レベルで具体的な動きが始まっている、そう感じられた年でした。

来年もこうした日モーリシャス交流を更に活発に続けていけますように、皆様のお力添えを引き続きよろしくお願いいたします。